
いない名前

ライカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知らない名前

【Nコード】

N6559F

【作者名】

ライカ

【あらすじ】

父と母に望まれずに産まれた少女『シキ』。愛情も温かさも教えられずに過ごす毎日に疲れ、自ら命をたつ事を選び目を閉じたが、目覚めたらいつもと同じ風景だった…

清々（すがすが）しい静かな朝、右手に光るものを持った一人の少女がつぶやいた。

「おじいちゃん、約束守れそうにないです。
ごめんなさい。
すぐにそっちに逝くからね、待っててね」

目の前に誰かが居るかのように語り微笑む少女。

少女の手首には、いくすじもの傷があった。
今の言葉で勇気が出たのだろう。
刃物をもつ右手に躊躇い^{ためら}の震えはなくなり、力強く縦に刃を滑らせた。

「……………これですべて…終わるのかな…
…終われるのかな…」

すでに痛覚は無くなっているのだろう。
少女の瞳には感情は無く『血』という名の『命』が止めどなく流れ出ていく様をただ静かに見つめていた。

「さようなら…」

誰に言うでもなくただ紡がれた言葉。

少女はベットに横になり、自分の命が尽きるのを瞳を閉じて静かに

待った。

目が覚めたとき、少女はベッドに寝ていた。

「…？……ここは…？」

少女は部屋の灯りが眩しかったのだろう。光を遮ろうと腕を持ち上げた。

「…あれ…包帯…？」

少女の手首には包帯が巻かれていた。

この家には少女を心配してくれる人などましてや治療をしてやろうと思う人などいない。

「誰が…包帯なんて…」

その時部屋に、誰かが入ってきた。

少女はその人物を見て目を見開き信じられないという顔をして次第に嬉しいような戸惑ったような顔をしながらその人物に聞いた。

「あ、あの…。これ、おと…」

その人物、父親は少女の言葉にも耳を貸さずに、忌々（いまいま）しそうに言い放った。

「お前がどこで死のうと勝手だが、私の見える範囲で死ぬことは許

さん!!

そして私の家を汚す事も私の名を汚すことも許さん!!
死ぬのなら私の目の届かないところでやれ!!」

少女を労^{いたわ}る事も、心配する言葉も言わずにそれだけを言うと、足早に部屋を出て行ってしまった。

父親が出ていった所をジッと見つめていた少女の顔には表情が無かった。

怒りも悲しみも、涙さえも出ていなかった。

「ははは……他所でやれ……か……」

少女の口から乾いた笑いと言葉が出てきた。

「心配なんて……してくれるわけ……ないか……」

少女は父親が部屋に入ってきた時、淡^{あわ}い期待をしていた。

少女を心配して見にきてくれたのではないかと。

しかし、少女に叩きつけられた現実^{けんじ}は、まるでゴミを見るかの様な、嫌^{きら}悪^あの眼差^{まなざ}しだった。

「そんなに、嫌いなんだ……」

誰の耳にも届かない少女の言葉。

おもむろに立ち上がり、部屋を出ていった。

居間を通りすぎる時に母親と目が合ったが、母親は少女に関心が無いのかすぐに目を反らしてしまった。

少女は唇を噛みしめ家を後にした。

少女の心の中では家は少女を縛りつける檻となり心も体も安らげる場所では無くなっていた。

1（後書き）

短いですね…あっ！帰らないで下さい。もう少しお付き合ってください！あまり得意分野では無いのですが、一応これから恋愛？になるのでしょうかね…。お客様に聞いても解らないですよ…次も遊びに来てください（＾o＾）／

ギーギー

公園のブランコに腰かけている少女。

「この公園っていつも静かだな…」

辺りを見回す。

この公園にあるのは、ブランコ、滑り台、砂場と鉄棒だけが設置されている。

広くはなからと言って狭いわけではない。

「私って何なんだろう…」

私は…誰…？ どうして、生きているの…？

どうして生まれてきたの？」

誰に問いかけるでもなく呟く。

たとえ問われたとしても答えに詰まってしまうだろう。

「家^{あそこ}には、あの人達（両親）の所には帰りたくないなあ」

さっきの父親に投げかけられた言葉が少女の心の中にあっただわずかな両親に好かれていたのではという思いをスタスタに切り裂かれてしまったため、悲しみが心を占めていた。

夕陽が傾き暗くなり始めた空に星が出てきても、少女はその場を動かずに空を見上げていた。

秋に入っただけだと言えども夜はそれなりに冷えるのだ。

少女は羽織るもの一つ持たずにシャツにジーンズという薄着のままここに来てしまったのだ。

しかし、少女には関係が無かったようだ。

「ここで、何にもしないでジッとしてれば、死ねる…かな…？」

こんなことで死ねるなら態々（わざわざ）手首切ったりしないか、ふふふ」

包帯の巻かれた左手首を見ながら自分の馬鹿らしい言葉に鼻で笑ってしまふ少女。

事実、少女が帰らなくとも心配する者は誰もいない。

むしろ邪魔者がいなくなつたと喜んでいるかもしれない。

すべての感情を清算するように少女はゆっくりと瞳を閉じた。

2（後書き）

お疲れ様です。　ここまで読んでくださるのはお客様だけですよ（泣）　今回のお話しはもぐら叩きの穴の様に穴だらけです。はい、わかっていきます（T・T）　でもその穴におもいつきりツツコミを入れてください！！　でもソフトにお願いします。（気が弱いので…）あれ？矛盾してますね…。ちょっと裏話？実は今回のお話し2部にわかれていたんです！！でも、文字数の関係上2つをくつつけちゃいました（笑）　あつ、ながながとお付き合いくださってありがとうございます。　まだもう少し頑張って続きを書くので、次も遊びに来てください（^o^）ノ

「お姉さん、お姉さん」

軽く肩を叩かれ起こされた。

「う……ん……」

「お姉さん、こんな所で寝てると風邪ひきますよ」

男の子の声が聞こえてきて少女を揺り起こす。

「起きて下さいよ」

少女はうつすらと目を開ける。

「……だ……れ……？」

かすれた声で少年に問う。

少し茶色がかったショートヘアの髪に幼さの残る可愛い顔の14、5才の少年が立っている。

「通りすがりの者です」

当たり障りのない返事が帰ってきた。

まだ、寝惚けているのだろうか。

「通りすがり……さん？」

「違いますよ。」

いいから、起きて下さい」

少年は笑いながら少女を揺する。

「いいの。私はここで寝るの」

しかし、少女はまた眠ろうとする。

「こんな所で寝たら、本当に風邪ひきますよ。死んじゃいますよ！？」

少年は少し焦った様子で何とか少女を起こそうと何度も揺する。

「いいの。私はここで永遠の眠りにつくの」

冗談とは思えない事を言いながら頑として動こうとしない少女。

しかし、根気強く言葉をかけ続ける少年。

「そんな事、言わないで下さいよ。ご両親が心配してますよ？」

「私を？ ふふふ…心配する親なんて…いないわ…」

父親の言葉が呼び起こされ寂しそうな顔をする少女。

「でも」

少年の言葉を遮るように少女は言葉を発する。

「私が居ない方があの人たち（親）にとっては幸せなのよ…」

少女の言葉に少年は悲しみの目を向ける。

「子供を心配しない親なんていませんよ」

少女に言い聞かすように言う少年。

しかし少女はすぐに否定した。

「それでも、ないと思うよ…貴方の家はそうかもしれないけれど」

少女は一呼吸おいて。

「現に、家の親がウチがそうだもの。
だからほっておいて」

と少年との会話はこれで終わりとばかりに少女はまた、眠りに入ろうとする。

「わかりました！

じゃあ、せめてここじゃない所で眠ってください」

そう言い少年は少女の手を掴んで引っ張る。

「ちょ、ちよつと！

何処に連れて行くつもり！？」

少女は足を踏ん張り歩みを止める。

「ここじゃなくて、もっと安全な所です」

「安全な所ってどこ！？」

少年の手をはがそうともがく少女。

しかし少年の手は少女がどんなにもがいてもしつかりと少女の手を掴んで放さない。

「家^{ウチ}です」

少年のはつきりした言葉に不安の表情を浮かべる少女。

「誰の！？」

「僕の」

少女の問に即答する少年。

「イヤよ！何で知りもしない人の家に行かなくちゃいけないのよ！？」

少女がそうわめくと、少年は足を止め少女に振りかえる。

「そうですよね。

うっかりしてました」

少年は何かを探すようにごそごとカバンをあさる。

「はい」と少年に差し出された物を見つめる少女。

「なに…これ？」

「僕の学生証です」

「…で？」

渡されてもどろろというのだという顔をする少女。

「無いよりはましかと思うんですけどね」

「見てください」と促す少年。

「今は、これしか僕の身分を証明してくれるものがないんです」

少女は渋々それに目を落とす。

「五十嵐^{いかりし}…依吹^{いぶき}…

中学校3年A組」

少女は一通り学生証に目を通した

「見たわよ!」

突き返された学生証をカバンにしまいながら、

「これで、お姉さんと僕は知り合いになりましたね」

ニツコリと笑う少年、依吹。
「それじゃ行きましょう」
そして、また歩き出す。

「ところで、お姉さんの名前は？」

依吹は今まで少女に名前を聞いていなかったことを思い出した。

「…好きに呼んで…」

少女は投げやりに呟く。

「ダメですよ。」

ご両親から頂いた大切なものなんですから」

少し困ったような顔をしながら言う依吹。

「私には名前なんて無いのよ…。」

ウチの親は私の名前なんて呼んでくれないもの…」

少女はうつむき自分で言った言葉に胸を痛める。

「いつも無視してるくせにたまに思い出したみたいに呼ぶときは、『おい』とか『おまえ』とか、物みたいに呼ばれる…」

依吹は独り言の様に話す少女の言葉を静かに聞いている。

「だから、私には名前なんて無いのよ」

自分に言い聞かせるように同じ言葉を繰り返す。

依吹はそつと少女の手を取り優しく握る。

「お姉さん、そんな苦しそうに泣かないで下さい。」

少女は自分が涙を流していることに気づかなかった。

依吹はそつと指先で少女の涙を拭^{ぬぐ}った。

「お姉さん、ちゃんと泣きましょうっ?」

少女は何を言われているのか解らないと言う顔を依吹に向ける。

「ずっとそんな風に泣いてたら、心が苦しくてここが破裂^{はれつ}しちゃいますよ。…ね?」

自分の胸元を指差し、下から少女を除きこみ、見上げるように微笑む依吹。

さつき会ったばかりの人にどうしてもこんなに優しくできるのだろ
うと思う少女。

依吹の優しさに自然と涙が溢れだした。

「わ、私…あんなところ（家）には、…帰りたく、ない」

小さくて聞こえるか聞こえないかというくらいの大きさの少女の
声を聞き漏らさないようにと耳を傾ける依吹。

「今のお姉さんにはゆつくりと休む事が大事なんですよきつと」

ニツコリと微笑む依吹。

「さあ、行きましょう」

手を軽くひき歩みを促す。

「ダメ…行けない…」

しかし少女はそこから動こうとはしない。

「お姉さん？」

「ダメよ…。貴方に迷惑がかかるわ…」

依吹は少女の手を温めるかのように両手で少女の手を包み込む。

「僕に迷惑がかかるとかそんなこと気にしなくて大丈夫ですよ。今は、お姉さんがゆっくり休める方が大事なんですから」

さあ、と言いまう一度少女の歩みを促す。

「……………」

少女がぼつりと何かを呟いた。

「何ですか？」

依吹は聞き取れなかった為少女に聞き返した。

「貴方が私の名前をつけて」

今度は聞こえるようにはっきりと言った。

「僕が名前を……？」

コクンをうなづ頷く少女。

「でも、お姉さんには呼ばれていなくてもちゃんと名前、ありますよね？」

それでも僕がつけて良いんですか？」

「親につけられた名前は嫌なの。」

生まれたときから嫌われているって思い知らされるから」

「お姉さんの本当のお名前お聞きしてもいいですか？」

依吹は遠慮などせずにズバツと少女に問いかけた。

少女はイヤだと言うように首を横にふる。

「確かに、嫌なことを答えるのは僕だっていやです。それに、僕から誘っていますが、何処の誰だか知らない人を家に招くなんて馬鹿なことですよね？」

依吹の言っていることは最もな事だった。

「わかった、言うわ。

でも本当にこの名前は嫌いな。だから、絶対に貴方が私に新しい名前をつけて。

本当の名前にはならないってわかってる。

でも、呼び名だけでもいいから。

約束してくれる？」

少女は依吹の瞳を真っ直ぐに見つめ言った。
依吹も少女の瞳を見つめ何かを考えている。

「わかりました。約束します」

少女は瞳を閉じて、深く深呼吸をする。
自分自身に落ち着けと言い聞かせながら、意を決して口を開く。

「私の名前は、紫鬼^{しき}、『紫の鬼』と書くの…。

名字は貴方と同じよ。これはすごい偶然だったけど」

少女は依吹を見て、

「貴方もこの名前で私を呼ぶ？」

『紫鬼』という名前で呼ばれてしまつかもしれない怯えた目で依吹を見る少女、紫鬼。

それに対して依吹は少女、紫鬼の怯えを読み取ったのか、首を横にふり心の中で

『実の子供にどうしてこんな酷い名前を』

と少女の親に対して憤りを感じていた。

しばらくの間、二人の間には会話がなく沈黙が流れていた。

「
涙
」

依吹が呟く。

「『涙』というのはどうですか？」

と空中に文字を描く。

「泪…」

少女は自分の胸に手をあて目を閉じる。

「でも、どうして泪なんて？」

少女、紫鬼は何気ない疑問を依吹に問いかける。依吹は恥ずかしそうに頭をかきながら

「不謹慎かもしれないのですが、お姉さんの流す涙がとても綺麗ふきんしんだったから」

ハニカムように笑う依吹。

依吹の笑顔につられるように少女、紫鬼を改め泪も笑顔になる。

泪は依吹に名前をつけてもらった瞬間からまるで雛鳥が始めて見るものを親と思うように依吹に好意を持ち始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6559f/>

いらない名前

2010年10月9日14時37分発行